

「王女の誕生日」における外面と内面の美醜の相克とそのアイロニー

森元 奈菜

1. はじめに

オスカー・ワイルドは、1854年10月16日に英国植民地時代のアイルランドの首都であるダブリンで生まれる。ダブリンのトリニティ・カレッジに入学した後、オックスフォード大学に留学し、そこでジョン・ラスキンの社会改革の思想やウォルター・ペイターの唯美主義の影響を受けた。ワイルドは、生涯で2冊の童話集を出版している。1888年に出版された童話集『幸福な王子、その他の物語』には、「幸福な王子」、「ナイチンゲールとばら」、「わがままな大男」、「忠実な友」、そして「すばらしいロケット」の5つの童話が収められており、さらにその3年後、2冊目となる童話集『ざくろの家』を出版する。この童話集には、「若い王」、「王女の誕生日」、「漁師とその魂」、「星の王子」の4つの童話が収められている。1冊目の童話集に含まれる「幸福な王子」や「わがままな大男」などは世界的に有名な物語として知られているが、2冊目の『ざくろの家』に関しては、装飾的な描写が多く盛り込まれ、物語を理解することがより難解になっている。また、先行研究では、童話としての慣習的形式からも大きく逸脱していることが指摘されている。W・B・イエイツは、『幸福な王子、その他の物語』を高く評価する一方で、『ざくろの家』は不必要な描写や過剰な装飾によって台無しになっていると述べている(John Sloan, "Introduction," *Wilde: The Complete Short Stories*, p. viii)。その代表の一つに「王女の誕生日」が挙げられる。この作品では、その装飾性の過剰な物語空間にあって、注目すべきは、主人公の王女と侏儒の二人に外面の美と内面の醜さという、童話における一見慣習的と思われるモチーフが窺え、その相克が展開するとともに、モチーフへのアイロニー的叙述が見られる点である。従来は、王女の外面的美と侏儒の外面的醜さにのみ関心が集中していたが、双方の主人公にあっては、ともに内面的醜さのモチーフが(特に侏儒にあっては)潜在していることに注目することで、この外面的美、内面的美また内面的醜さが複雑に交差する場に、この作品の新しい意味を見出すことができるのではないかと考える。本発表では、『ざくろの家』の中でも、装飾的な描写が多い「王女の誕生日」を取りあげ、外面の美醜と内面の美醜との関係をめぐり、童話における一見慣習的とおもわれるモチーフが共通して見られ、その相克とアイロニーが確認できる点を検証し、その意味を、ワイルドの芸術論とも絡み合わせて考察していきたい。

2. 侏儒と王女に見られる共通点

王女も侏儒も、自身の欲望を求めるという点では同様に快樂主義だと言えるが、二人の求める快樂は異なるものであることも分かる。王女の求める快樂は、現実に存在するものから得られる種類のものである。それは、貴族の子息たちによる闘牛の見世物、フランス人の綱渡り、イタリア人によるあやつり人形劇、アフリカの奇術師による蛇使いなどの奇術、「泉の聖母教会」所属の少年舞踊隊のミニユエット、エジプト人たちによる楽器の演奏や熊と猿の芸、そして侏儒の踊りだった。これら全て、王女が実際に目にしたものであり、王女自身が想像を膨らませたものではない。その一方で、侏儒は、王女から貰った白いばらをきっかけに、彼女から愛されていると思い込むことで、王女と森の中で暮らすことを想像し、食べ物に苦勞するほどの貧困で、父親からも愛されていない森の中でも自身は幸せに暮らしていると想像している。そのどれもが現実には存在しないものであり、侏儒の想像力を働かせたものであることが分かる。そのため、王女と侏儒はどちらも快樂主義でありながら、その質は違うものだと言える。

3. 芸術観との関連性

芸術に必要不可欠な要素である想像力によって、侏儒は自身の暮らす環境を作り上げている。実際には、侏儒は森から宮廷に連れてこられた際、彼の父親は、醜く役立たずの子どもが厄介払いできることを喜んでおり、全く愛されてはいない。宮廷の庭の花々は侏儒の醜い容姿と、走り回る様子を嫌悪している。しかし、侏儒はそのような現実には一切目を向けていない。侏儒は想像の中で、山賊や森を通る兵士、修道士について言及しているが、彼らが自身に対してどのように思っているのかについては、何も描かれていない。想像することに快樂を求める侏儒にとって、彼の容姿に対する嘲笑や、父親から愛されていないという事実はなかったことになっている。また、侏儒にとって最も喜びの妨げとなる自身の容姿についても、彼の想像の中で言及されている点はほぼ見られず、身長以外については一切触れられていない。王女は自らの想像力を伴わない実体験

からの実在する快楽を求め、侏儒は想像をすることで、快楽を追求していた芸術家である違いがあることが分かる。また、王女は、侏儒の死を目の当たりにした際、「これからさき、あたしのところへ遊びにくるものは、心臓のないものにしてね」(159)——“For the future let those who come to play with me have no hearts” (170)——、と叫び、物語は終わっている。ここからも分かるように、残酷な内面が窺える。一方で、侏儒は物語の中で、醜い外見はしているが、一見心優しい人物として描かれている。しかし、宮廷に住む王女の気持ちへの配慮が欠落しているとも言える点においては、王女の残酷さとも共通する部分だと言える。

4. 鏡が持つ意味

ワイルドの芸術観は、想像力を必要とするものであるため、あるがままに存在するものを表現することを嫌う。ワイルドのもうひとつの対話形式の批評論「嘘の衰退」においても、芸術がありのままに全てを映すことに反対している。侏儒は鏡で自身の姿を見ることにより、芸術の世界から、つまり想像の世界から現実の世界へと引きずり出されてしまう。そして、自身の醜さを知り、今まで子ども達や王女が自分を見て笑っていた本当の理由を理解する。この場面には、想像が芸術に必要不可欠であり、鏡や写実的な表現はそれに反するというワイルドの芸術観が反映されている。鏡を見るまで自身の想像の中で生きてきた侏儒は、貧しい生活や醜い外見にも関わらず、森の中で幸せに生きていた。鏡は、侏儒に現実を見せることによってその想像力を奪い、芸術家としての侏儒を殺してしまう。侏儒が鏡を前にした際、鏡に映った醜い怪物に対して茶化すようにおじぎをしたり、殴ってみたりするが、次第に周囲の状況が鏡に映っていることに気がつく。そして、鏡に映っている怪物が自分自身だと知り泣きくずれる。現実と直面した侏儒は、その瞬間に芸術家としての死を迎えたとと言える。

5. おわりに

侏儒はその醜い外見に注目されることが多いが、想像によって喜びを求める快楽主義者であり、芸術家とも言える。そして、侏儒が快楽主義者であることは、外見は美しいけれど、残酷な王女と、醜いが心優しい侏儒、という「王女の誕生日」における対比を揺らがせることになる。侏儒は想像の中で王女を求めており、想像の中で自分に不都合となる彼女の気持ちを一切顧みることにはない。このように王女の気持ちを無視した侏儒の想像は、王女の残酷さと類似のものであると考えられる。また、実際の事象から得られる喜びを追求する快楽主義者である点も、侏儒と類似するものとなっている。以上の点から、王女と侏儒においては、王女は現実の世界での快楽を、侏儒は想像の世界の中での快楽を求める人物として設定されていることが分かる。それに加えて、ワイルドの批評論から見られる芸術観から検討すれば、侏儒は芸術家を表象する人物と解釈することができる。そして、慣習的な童話のタイプでは、善と悪を表象する人物は、対立的に描かれるが、このワイルドの童話では、快楽主義者という点で、その質は違うものだとしても、互いに共通する面を持っている。この共通の面がある点がワイルドの童話がもつ固有の特質でもあると考えられる。そして、結末には、芸術家だと考えられる侏儒の死が描かれている。この芸術家という存在を、その芸術家の死という、アイロニーの視点から描くことにより、ワイルドの芸術観が、鮮明にも逆説的に浮かび上がってきており、ここにワイルドの童話と芸術観が一つに結晶していると考えられるよう思われる。

【主要参考文献】

- Ericksen, Donald H. 'The Stories', in *OSCAR WILDE*, G.K. Hall & Co, 1977.
- Killeen, Jarlath. *The Fairy Tales of Oscar Wilde*. Ashgate Publishing Ltd, 2007.
- Sloan, John. 'Wilde and Intellectual Issues,' in *Oscar Wilde*, Oxford World's Classics, 2003.
- Vyvyan Holland, ed., 'Phrases and Philosophies for the Use of the Young,' *Complete Works of Oscar Wilde*. London and Glasgow: Collins, 1967.
- W. B. Yeats, 'Introduction to Oscar Wilde, *The Happy Prince and other Fairy Tales* (1923)', in *W. B. Yeats: Prefaces and Introductions*, ed. William H. O'Donnell. Basingstoke, 1988.
- Wilde, Oscar. 'The Birthday of the Infanta,' in *The Complete Short Stories*, 2nd Ed. Oxford World's Classics, 2010.
- Wilde, Oscar. 'The Decay of Lying' and 'Critic as Artist,' in *Intentions and The Soul of Man*. Ed. Robert Ross. Dawsons of Pall Mall, 1969.